



2月の行事(進路関係等)

- 1(月) 高校入試会場準備(6校時) 登校日③
- 2(火) 家庭学習日(高校前期募集検査日)
- 3(水) 国公立大学出願締切日③ 登校日③
- 6(土) 土曜課外①、土曜講座①
進研マーク・進研ブロード②[~7(日)]
- 8(月) 単位追認試験③ 生徒協議会
- 9(火) 部費ヒアリング
- 10(水) SSH 中間報告会(AM40分授業) 登校日③
- 11(木) ● 建国記念の日
- 12(金) 月曜日授業
- 13(土) 土曜課外①②、土曜講座① 登校学習会②
- 15(月) 試験時間割発表 PTA委員会①②③
- 17(水) 登校日③
- 19(金) 卒業式会場設営
- 22(月) 第5回定期試験[~25(木)]
- 23(火) 登校日③
- 26(金) 40分授業 卒業式準備 大掃除 登校日③
- 29(月) 卒業式予行 表彰式

※○数字は学年を示します

<大学入試センター試験を終えて>

1月16日(土)・17日(日)の2日間にわたって大学入試センター試験が実施されました。本校生徒は山梨大学(武田キャンパス)、山梨県立大学(池田キャンパス)、山梨英和大学の3会場に分散して、試験に臨みました。

私は両日とも山梨大学(武田キャンパス)会場にいましたが、1月にしては珍しく穏やかな天候で、特に1日目は日差しが暖かかったこともあって、昼間になると多くの生徒が外に出てきて、ベンチや階段、あるいはロータリーの周りに陣取って友人同士でお弁当を食べる光景を目にしました。

2日間、欠席者もなく、トラブルもなく終わったことにホッとしましたが、試験当日とは一転して

18日(月)未明から降り出した雪は「自己採点」を混乱させました。

今回の大学入試センター試験の各科目平均点の分析によると国語が易化、数学は昨年のⅡBに続いてⅠAが難化、理科については化学が難化、生物は易化したと報道されました。そして、それらの科目の難易度変動とも絡んで総合得点は、文系生徒が平均点上昇、理系生徒は下降傾向(いずれも昨年度比)にあるようです。

本校3年生の中には、「意外とよく取れた」という者もいれば、一方で「もう少し取れると思っていた」という者もいるでしょう。とにかく、それぞれの“結果”と“思い”を積んで大試験は終わりました。済んだからには、前号で紹介したとおり、「前後際断」の気概を以て歩みましょう。さあ、前を向こう。

そして1・2年生の皆さん、先輩の姿は1年後、2年後のあなたたちの姿です。3年生の姿を自身に重ね、まずは目の前の一步を踏み出すきっかけを掴んでほしいところです。



<国公立大学出願期間締切間近!!>

1月21日(木)、大学入試センター試験自己採点結果の返却に合わせて、3年生の各クラスでは国公立大学出願に向けて面談が行われたことと思います。このことを受けて1月25日(月)からの4日間、クラス担任と第3学年主任、そして私の3人が、各クラスの面談の内容とデータをもとにして、一人一人の出願先を再度確認・検討する会を持ちました。7クラス全員の検討に要した時間は、実に30時間余り…。そこで挙げた事項のうち、特に伝える必要のあることについては、担任から各自にフィードバックされていると思います。いよいよ国公立大学<前期><中期><後期>への出願を行う時期になりました。出願締切は2月3日(水)、消印有効・必着のそれぞれがあります。短期間の中で早急に準備しなくてはならないわけですが、3年生の皆さん、間違いのないように手続を踏んでください。

<南高生に読んでもらいたい一冊>



今回は、立川談春著『赤めだか』(扶桑社文庫、2015)…。ハードカバーで2008年に刊行されていますが、昨年刊行された文庫本を紹介します。昨年末、嵐の二宮和也さんが主演した同名ドラマは記憶に新しいところでしょう。

本の中身は、落語家・立川談春の前座時代を回顧した青春ストーリーとも言うべきものですが、随所に著者の師匠「立川談志」の存在が光ります。

正直言うと、立川談志(1936～2011年)の生前、私は談志を嫌っていました。横柄な態度や発言に起因する印象でしたが、彼が亡くなって数年が経ち、少しずつ魅力を再認識する機会があります。この本はそのうちの一つでした。

談志は弟子・談春に向かって言います。「己が努力、行動を起こさずに対象となる人間の弱みを口であげつらって、自分のレベルまで下げる行為、これを嫉妬と言うんです。…よく覚えておけ。現実**は正解なんだ。時代が悪いの、世の中がおかしいと云ったところで仕方ない。現実**は事実だ。****そして現状を理解、分析して把握

してみる。そこにはきっと、なぜそうなったのかという原因があるんだ。現状を認識して把握したら処理すりゃいいんだ。その**行動を起こせない奴を俺の基準で馬鹿と云う。**」…実にインパクトを感じます。

また、談志は反目して袂を分かった師匠柳家小さんの死後、弟子の前でこう語るのです。小さんの葬式にも出席しなかった彼は、「葬式、つまり儀式を優先する生き方を是とする心情はオレの中にはないんです。そんなことはどうでもいい。何故なら…オレの中には、いつも小さんがいるからだ。」…事の是非はともかくとして、反目しながらも師匠を想う談志の優しい一面に、どこか温かみを感じました。

その「談志」に惚れ込んで弟子入りしたのが著者「立川談春」。私と同年でした。昭和41(1966)年・丙午生まれの49歳。高校を中退して、落語家を目指した談春と同時代を生きた私は、共感しながらも、「同じ年に生まれて、こんな経験をした人もいたんだ…」とどこか尊敬の念に似た感を抱きました。

文章が巧く、言葉のテンポが良く…、読み進めると、まるで実際に顔を合わせて話を聞いている感さえあります。「今、最もチケットを取れない落語家」の評価を得ている立川談春の本、面白いですよ。

<「はじめての〇〇」の先は「大人」を実感する機会?!>

数日前、出張で東京に出かけました。

中央線で甲府に帰ってくると、笹子トンネルを抜けて勝沼を過ぎたところで車窓一面に甲府盆地が大きく開けてきます。この風景を見て、ホッとする気持ちは20代どころから変わりません。

2月に入ると、まず私立大学の受験…。下旬以降には国公立大学の入試も始まります。全国津々浦々の受験生が日本中を大移動する日々がしばらく続きます。

私は今から数十年前に大学受験を味わいました。何もかもが一人…「**出願先を調べて願書を取り寄せ、書類を整え、ホテルを予約し、「切符を買って電車に乗り、知らない駅で降りて町を歩いて、一人で食事をしてホテルに泊まって、受験をして…」**の一つ一つの経験は、当時の私にとって大冒険の連続でした。

いろいろな“初めて”は良い経験でした。中央線で帰甲する際、冒頭に書いた景色を目にしたときの「肩の力が抜けていく」感は今も鮮明に甦ります。JR甲府駅に降り立ったとき、甲府の町をやけに懐かしく感じたあの感情、それとは裏腹に、甲府の町が今までよりも少しだけ小さく見えて、自分が少しだけ大人になったような感慨…。あれは決して気のせいではなかったと思います。

大学受験シーズンに何となく思い出す一コマ。**3年生の皆さん、…今は出口が見えずに辛いかも知れませんが、いずれ懐かしく思い起こす日が必ず来ます。そのときが楽しみですよ。**